
カーテンの裏側

朝花 訝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カーテンの裏側

【Nコード】

N3002B

【作者名】

朝花 飴

【あらすじ】

あのカーテンの裏側から彼は消えてしまった

そこは秘密の入口

学校の教室で

1人の男子生徒が
忽然と消えた

授業開始数分前

その時は

彼も

確かに教室にいた

だって

私はずっと

彼を見ていたから

「ねえ？」

元気良く
幼馴染みのアイが
話かけてきた

「…ん？」

ユミは
窓際の席に座る
彼から
名残惜しくも
眼を離れた

「またイイザワ君ばかり見てるね」
「や…ちよつとやめてよ」

ユミは耳まで赤くなってしまい

アイは

ニヒヒと笑った

「想ってることは

言ったほうが楽になるよ」

アイはユミの

手を握り

「友情は愛には
勝てないのね」
と

大袈裟に振る舞った

「もう…

何言ってんのよ

そんなことないよ」と言いながらも

ユミは彼の方を見た

その瞬間

ユミは

眼を疑った

さっきまで

そこにいたはずの

彼が

消えてしまっていた

開いていた

窓からの風に

カーテンが

ひらひらと躍る

まるで

手招いている様に

「あれ…？」

「どうしたの？」

アイは

ユミと同じ方向に
目線を重ねた

「ねえ…」

イイザワ君が
消えちゃった」

アイは

そんな彼女を見て
困った顔をしながら

「トイレなんじゃないの？」

「でも…」

さっきまで」

辺りを見渡しても
彼の姿が無い

ユミは

不思議な感覚に
訳が解らなくなった

ほんの少し

眼を離れた隙に

彼は姿を

消してしまったのだ

「どこに

行ったんだろ？

イイザワ君…」

ユミの口から

彼の名が

出てくる度に

アイは

少し

胸が痛むのを感じた

「そのうち

戻ってくるって

…ほら、もう

チャイムなるし」

そう言って

アイは

席に戻って行った

ユミは

納得出来ない顔で

ずっと彼の席を

眺めていた

ずっと

その日
イイザワ君は
その席に
帰ってくる事は
なかった

クラスの皆は
騒然となったが
ただの
エスケープだろうと
誰かが言ったのを
きっかけに
いつもの状態に戻り
教師さえ
仕方ない…と
苦笑いして
残りの生徒に
今度このような事がないように…などと
帰りのホームルームを30分引き伸ばした

ユミはまだ
窓際の席を
見つめていた

「帰んないの？」

いつの間にか
ホームルームは
終わり

アイは
帰り支度を済ませて
ユミを待っていた

「…うん……帰る」

ユミはアイに
向かって
ごめんね…
と微笑んだ

「大丈夫だよ
明日は来るって」
アイは彼女の肩を
ポンッ叩いた

「そうだよね」

ユミは笑って
アイの肩をポンッと
叩いた

そして2人は

笑い合つて
教室を後にした

窓際のカーテンが
窓も開いていないのにも関わらず

ひらひらと
躍っていた

2

そして

誰もいなくなつた
教室の窓辺に

彼は立っていた

唐突に現れた彼に
その場にある

すべてが

固唾を呑む

しかし

彼は

微笑んでいた

校門をくぐる

2人を見送りながら

さよなら

…と静かに告げた

少しだけ

その場の空気が
和んだ気がした

彼は

ゆっくりと

自分の席に座り
教室を見渡し

そして

密かに好意を
寄せている人を
想った

ゆっくり

眼を閉じる

これからする事と
僅かな願望を思った

彼の中に少しだけ
後悔と罪悪感が
横切った

しかし

それを打ち消す様に
机に突伏して

頭の中を否定した

しばらくしてから
彼は

ふう…と
溜息を吐いたかと
思えば
嗚咽を出して
泣き始めた

「イイザワ君!？」

突然
大きな声で呼ばれ
彼の体がビクッと
跳ね上がった

「うわっ
びっくりした」

思わず声に

出てしまった

それでも

彼は急いで

涙を拭いた

「イイザワ君

泣いてるの？」

「あ…いや

何でもないよ」

「何でもない

じゃないよっ

突然消えちゃうから

皆

心配したんだからね」

彼は少し

赤くなりながら

「ごめん

…ありがと」

と呟いた

「わ…私は別に…」

戸惑いながら

大袈裟な振りをした

「でも…どこに
行つてたの？」

私の恥ずかし紛れの
その質問に
彼は少しだけ
表情を曇らせた

「あの…
信じられないかも
しれないけど…
カーテンの裏側は…」

と

そこまで言っていると彼は
自分の中にある
答えを言うことを
拒んだ

「…やっぱり
何でもない」

「ちよつと…
気になるじゃない」

私のその言葉に
しばらく頷きながら
意を決した様に
口を開いた

「実は…僕はもう人間じゃないんだ」

訳の解らない事を言い始めたと思った

それを察したのか彼は

左手を差出してきた

「僕の半身はもうないんだ…」

私はその手を触ると恐ろしいほどに冷たくなっていた

「え…何？
どういう事？」

彼の右目だけが瞬きを繰り返す

悲しそうな眼だ…

「…どうしてここに？」

彼は聞いた
校門をくぐる姿を

見たからだ

「あ…それは
帰る時に偶然
この窓に
イイザワ君が
見えたから…つい」

私は
赤くなりながら
彼の顔を
見れなくなつた

私はイイザワ君が
好きだつたから…

それに
気付いたのか
彼は

「そうか…
これは運命の様に
繋がっていたんだね」
と言つて
私を抱き寄せた

「あ…あの…」
私は突然の出来事に
戸惑つた

彼の右側だけが

温もりを持っていた

「ありがとう…」

…ごめんね」

彼はそう言つと
私の頬に軽く
くちづけた

何もかも
唇も左側は
冷たかった

私はそう思つと
同時に
意識を失つた

「え…？」

彼は
自分の左半身に
温もりが戻るのに
気付いた

その後の光景は
想像を絶した

彼は
泣き叫び
狂った様に喚き
暴れた

彼の身体は
しっかりと
痛みを感じていた

傷だらけになった
左半身には
熱を持ち
流れる様に
血が溢れ出した

自分でも
どうなってしまったのか解らなかった

しかし

こうするしか
なかった

いつからだろう…

あいつに

あの紙を貰った時…

彼の意識は

錯乱していた

確か…

あいつに相談して…

あの紙を…

くちづけをした

彼が好意を

寄せていた彼女は

冷たい塊になり

永遠の夢を見ている

彼女の制服の

ポケットから

彼と同じ紙が見えた

体中が

心が

張り裂けそうだった
だった

「僕のせいで…？」

僕が奪ったんだ

僕が…？

…ごめんなさい

…ごめんなさい

…「ごめんなさい」

彼は

そう繰り返しながら

カーテンを

引き千切った

何故こうしてるのか

解らなかった

しかし

体は勝手に動き

カーテンを

体中に巻き付けると
助走をつけて

窓ガラスに

飛び込んで行った

その時

心が張り裂けた

その瞬間

見覚えのある姿を
見た気がした



翌日

アイは

ユミの死を知った

そして

イイザワの自殺を

騒ぎを聞きつけた

第一発見者の

用務員は

黒板に

血だらけの字で

カーテンの裏側に
入り込むな

と書かれたのを
見つけたそうだ

そのカーテンも
警察が来た時には
無くなっていたらしい

今その教室は
目張りがされ
誰も入れない

真相を突き詰める
手段は
何も残されては
いないのだ

カーテンも
ユミの死因も
イイザワの自殺も
その動機も

すべてが謎のまま

アイは

2人を失った

アイは

小さな声で呟いた

「2人共」

私を裏切るからよ」

そして

赤い文字で

何かが書かれた紙を

そつと燃やした

そして真相は

灰になり

ひらひらと

空を躍った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3002b/>

カーテンの裏側

2010年10月11日21時46分発行